

佐藤小夜子DANCE LABORATORY2016公演

「そこを右に曲がると…いや左かもしれない」

2016年3月12日(土)17回公演

名古屋市中東文化小劇場(名古屋市中東区)

吉田悠樹彦 舞踊批評家

シユールな出会いや日常の中の思いがけないものをテーマにしたコンテンポラリーダンスが上演された。舞台美術・衣裳を駆使し優れた作品である。

舞台上に1列、四角い白い枠(美術:福永朝子・人形劇団むすび座)を持ったダンサーたちが登場する。武田晴子による衣裳は白と黒のストライプだ。観る者の記憶に溶け込みや

すいし、表現主義的にも映る。超現実的風景の中を1列に並び動き出す。それぞれ見慣れた日常を異化させていく。四角い枠を棒のように変形したり、枠のようにちぐはぐに積み上げたりする。古井慎也のコミックな演技が目を引く。寓意のようなコミックな展開、人生の名場面達を象徴するような場面が舞台上に広がっておりのおおが物体の様になったり、ダ



撮影:杉原一馬(和光写真)

ンスをみせたりと多様な振付世界がアや枠の中でシリアスにもかく舞踏万華鏡のように繰り広げられる。や手達がみえる。若手の大坪奈央、河がて大御所の関山三喜夫がスーツで村姫夏、中陽美も活躍をみせた。ラ登場する。抽象の中の具象による表現は物語を加味していく。関山による「私の青空」を唄う榎本健一現は物語を手にしたタ列が歩んでいく。中京の大御所から田ますみ、中島由紀子、高野由美子、細直子、安藤恵子による展開から、時代性や現代性との接点が生まれ、旬なトップダンサーの関口淳子の名演技も見逃せない。関口は表情の変化とウォークラリーは近年でも群を抜くもので大きな見所だ。震災後の不安定な社会に対するユーモ

本作は東文化小劇場優秀舞台作品に選ばれた。中京には伊豫田静弘著「焼け跡のカーテンコール」(世界劇場会議名古屋、2007)にみる洋舞の発展がある。この本には関山の歩みも刻まれている。続く新時代の佐藤は良質を追及する才能だ。この地の芸術に新風を起している。